個人の「歴史」から探る障がい福祉

ひと

パーソナル ヒストリー

第5回

社会福祉法人 すてっぷ／理事長
鈴木 隆子さん

PERSONAL HISTORY

価値ある事業とは、細やかで人知れぬ出発、地道な労苦、向上を目指す無言で地道な苦闘の風土で真に発展し開花する。

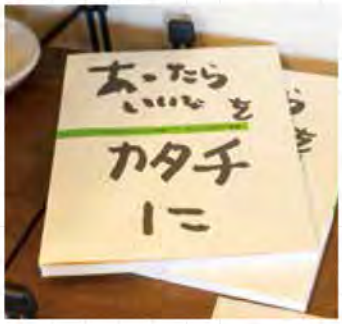
フローレンス・ナイチンゲール

近代看護医療の改革を行ったナイチンゲールの言葉に「物事を始めるチャンスを私は逃さない　例えそれがマスタードの種のように小さな始まりでも　やがて芽を出し　根を張ることがいくらでもあるから」というのがあります。

障がいのある子どもたちとその母親や家族に向けたボランティア活動が始まりとなって、後年に社会福祉法人を作ったのが今回「PERSONAL HISTORY」の主人公となる社会福祉法人すてっぷの理事長・鈴木隆子さん。

鈴木さんたち母親らが起こした最初のムーブメントは小さな種でしたが、それが芽を吹き、やがては大きな根を張ることになりました。

鈴木さんの履歴を紐解きながら、初期の活動から現在に至るまでの「思い」を詳らかにしていきたいと思います。



履　歴　書

令和元年9月1日現在

ふりがな　すずき　たかこ 氏　名　鈴木 隆子	ローマ字表記 Takako Suzuki
昭和28（1953）年 12月 4日生	□男　☑女

出身地 群馬県桐生市	趣　味 山歩き、温泉、旅行、読書
家族構成 本人、夫（長女、孫1人）	座右の銘 あきらめない／ノーマライゼィション／夢をカタチに 障害をもって生まれる子供たちは「人類進化の戦士たち」

役職・公職など　※役職などは取材時のものです

社会福祉法人すてっぷ・理事長、前橋市社会福祉審議会委員

年	月	職　歴
昭和51（1976）		群馬県内の高等学校教諭（～昭和56年）
昭和61（1986）		群馬県内の高等学校で非常勤講師（～平成3年）
昭和61（1986）		群馬町おもちゃの図書館「きしゃぽっぽ」代表（～平成9年）
平成3（1991）		「OPEN HOUSEすてっぷ」代表（～平成8年）
平成7（1995）		「有限会社サンサンすてっぷ」代表取締役（～平成12年）
平成12（2000）		「社会福祉法人すてっぷ」常務理事、「わーくはうすすてっぷ」施設長
平成21（2009）		前橋市「みんなの店」運営委員会会長（～平成26年）
平成30（2018）		「社会福祉法人すてっぷ」理事長
平成30（2018）	4	国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 医療福祉ジャーナリズム分野修士課程入学

※編注／職歴の一部を割愛させて頂きました

母親らのボランティア活動が後に福祉法人設立にまで至る

森　自身のお子さんに障がいがあったことが契機となって、ボランティア活動を経て社会福祉法人の設立に至ったとか。

鈴木　障がいを持って生まれて来た長男が4歳で早逝したのですが、彼の存在があってこそ後に「おもちゃの図書館」をボランティアで開設するきっかけにもなりました。

森　今でこそ同様の活動をしている団体は多いですが、30年以上前だと他には例がない活動だったと思います。

鈴木　近年になって唱えられている「ノーマライゼーション（※1）」という言葉ですら行政やマスコミが知らなかった時代でしたからね。

森　「レスパイトサービス（※2）」に関しても他に先駆けて開始したようですが。

鈴木　当時はまだ制度として存在していなかったサービスを先例が無い状態で立ち上げたので

※1・ノーマライゼーション／障害者の自立と社会参加を目指して 障害のある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと明るく豊かに暮らしていける社会を目指すという理念。
※2・レスパイトサービス／障がいのある人や高齢者などのケアをしている家族に代わって一時的にケアを代替する支援サービスのこと。レスパイトケアとも呼ばれる。

PERSONAL HISTORY

不安がありました。でも、たまたま新聞記事で他にも同じサービスを提供している団体が全国に4ヶ所あるのを知って、「他にも仲間がいる」と嬉しく思いました。すぐに連絡を取ってその人たちに会いに行ってしまいました（笑）

森　行動力がありますね。海外の視察にも何度か行っているようですが。

鈴木　「ノーマライゼーション発祥の地」と言われるデンマークとスウェーデンの視察に行きました。本当の意味でのノーマライゼーションが社会の中で当たり前のように実現されているのを目の当たりにできたことが、自分たちの活動を続ける支えになりました。それによって、「いつか日本でもノーマライゼーションが実現できるはずだ」と確信しました。

森　これまでの活動の中で、「行政に対して各種の福祉サービスを制度化するよう訴えた」こともあると聞いています。

鈴木　「レスパイトサービス」と「放課後クラブ」の制度化を行政に求める活動を行いました。障がいのある子どもを持つご家族や関係者と一緒に署名活動をしたり、その頃に同じ事業を始めていた群馬県内の団体と協議会を作って、制度化の必要性を行政に訴えたんです。その成果、群馬県の「県単事業（地方単独事業）」として新しい制度を作ることができ、補助金が支給されるようになりました。

取材＆文／森清香

森　「障がいの当事者とその家族が望むことは何か？」と考えて来た結果が、これまでの活動や施設の運営であったりするわけですね。

鈴木　障がい当事者の暮らし、そのご家族の生活、それらをノーマライズするために必要な支援やサービス展開を行って来ました。それが現在の「すてっぷ」の姿になったのだろうと思います。

森　私が女性だから余計にそう感じるのかもしれませんが、全てにおいて障がいのある子どもを育てているお母さんたちに対して強く訴求するメッセージのような「何か」があるように感じます。

鈴木　「障がいのある子どもを産んだ」と、謂われなく周囲に非難をされたり、根拠なく中傷を受けたりするお母さんもいるんですね。それで、「子どもに対して申し訳ない」だとか、自身を強く呵責する人がいます。それだけではなく、障がいのある子どもの育児に関して悩んでいる人も多くいます。そのお母さんたちの労苦や苦悩を少しでも軽減してあげたいという気持ちが根底にありました。それが初期の「レスパイトサービス」の提供や「放課後クラブ」の運営に繋がって行ったのかもしれません。

森　自身のお子さんに障がいがあったということも一連の動機になっていますか？

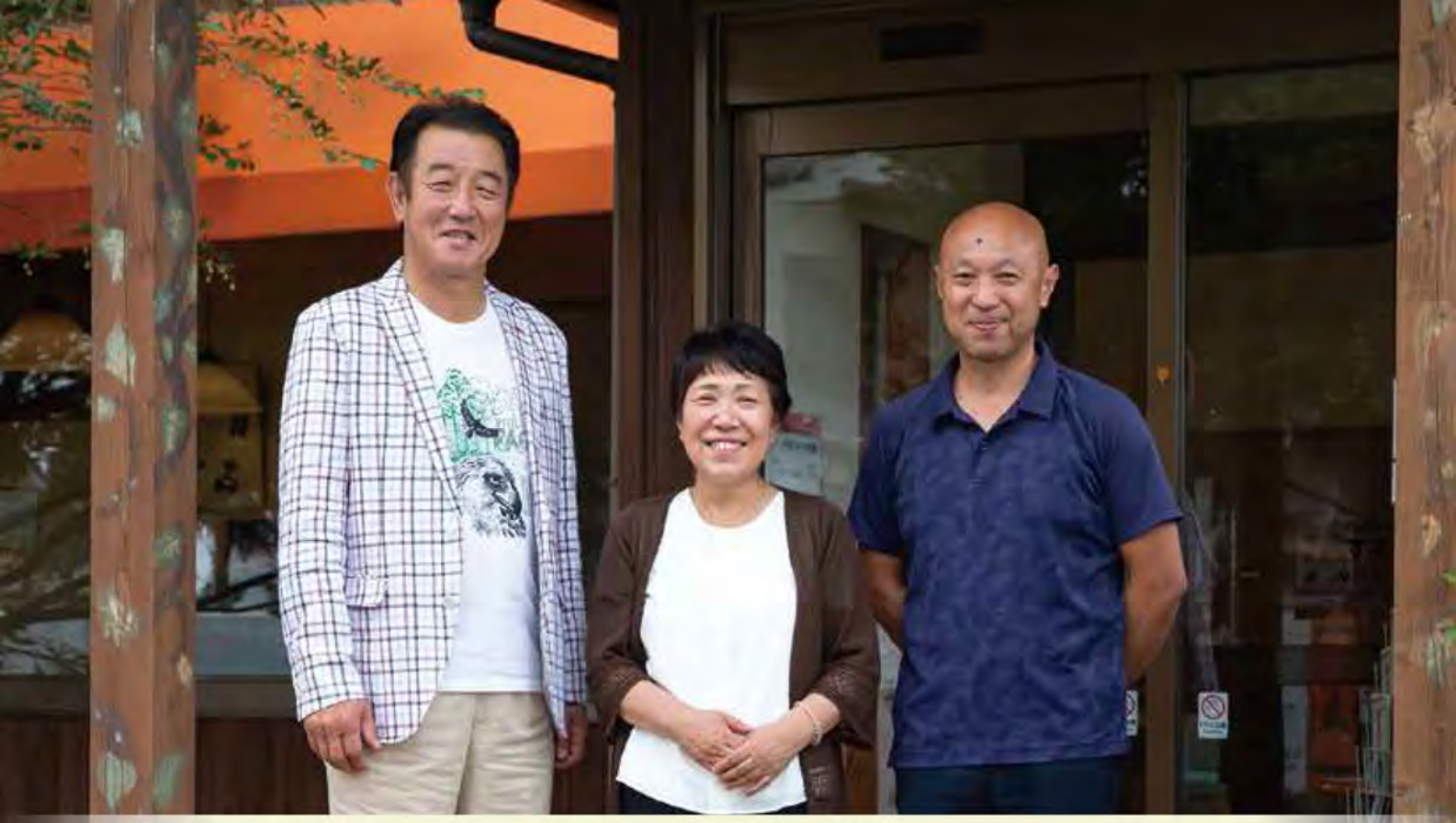
鈴木　それもあります。障がいのある子どもを持つお母さんの気持ちを私自身が理解できたことが大きいですね。

森　最後に、これからの展開や展望などを聞かせてください。

鈴木　これまでにも、先進的な取り組みなどを行っている団体や事業所があれば、自ら進んで出かけて話しを聞いたりして来ました。この先も、地域や社会、そして利用者とその家族のニーズにいかに応えていくかを弛まずに模索し続けて行きたいと思います。

取材・文／森清香

社会福祉法人 すてっぷ
群馬県前橋市東上野町136-1
TEL / 027-290-6161
https://s-step.com/



布施博 × 社会福祉法人すてっぷ 群馬県前橋市

障がいの当事者と家族の「あったらいいな」に応えて事業と施設を続々と「カタチ」にして行った福祉法人

読者の皆さんは「ノーマライゼーション」という言葉をご存じだろうか？
その言葉の意味を「ノーマライゼイションとは当事者の権利であり
それを実現するのが社会の責任である」と定義するのが
社会福祉法人すてっぷの理事長・鈴木隆子さんだ。
遡ること30年以上前の86年に、障がいのある子どもたちに
おもちゃを貸し出す「おもちゃの図書館」のボランティア活動を
始まりとして、現在では多くの福祉事業所を展開するまでになっている。
社会福祉法人すてっぷで同法人の設立から現在に至るまでを布施博が訊いた。

ボランティア活動から始まる「あったらいいなをカタチに」

布施　ボランティア活動を始まりとして設立された社会福祉法人だそうですね。

鈴木　86年に「おもちゃの図書館・きしゃぽっぽ」をボランティアで始めて、そこからいろんな活動を経て現在のようになりました。

布施　「おもちゃの図書館」っていうのは？

鈴木　障がいのある子どもたちにおもちゃを貸し出すという活動でした。群馬町（現・群馬県高崎市）にある公民館を借りて、月に2回開館していました。

布施　なるほど。おもちゃを子どもたちに貸し出すっていう発想は面白い。そのボランティア活動が次に繋がるわけですか。

鈴木　そこを始めて5年くらい経った頃に、ある

布施 博
ふせ ひろし

お母さんから「障がいのある子どもを持つ親に向けた講演会があるのだけれど、子どもがいるから行けない」という話を聞きました。「私たちが子どもを預かるから講演会を聞きに行って来たら？」って勧めて、子どもを預かったんですね。そのお母さんは2時間ほどしてから充実した顔で戻って来たんですよ。その時に、「障がいのある子どもが学校に行くようになってからも、ご家族も大変な思いをしているんだなぁ」と思ったんです。

布施　あぁ、そうか。障がいのある子どもを持つお母さんたちの中には「自由に出掛けられない」っていう悩みを持っている人もいるのか。

鈴木　「他の子どもの授業参観に行くことができない」だとか、「近所の冠婚葬祭の手伝いにさえ行けずに肩身が狭い思いをしている」という話しを聞くこともありました。

布施　例え数時間でも、障がいのある子どもを預かってもらえたら、その時間で用事を済ますなり何なりが可能になるわけだ。それはお母さんたちも喜びますよ。

鈴木　「おもちゃの図書館」の開館日の週に2回だけだったんですね。「開館日以外でも子どもを預かってもらえる所があったら良い」とか、「養護学校（現・特別支援学校）から帰って来た子どもたちが放課後に安心して遊べる場所が欲しい」という声が多く挙がって来るようにもなりました。その要望に応えて作ったのが「OPEN　HOUSE　すてっぷ」でした。

布施　福祉法人の名称もそうですが、「すてっぷ」と名付けた理由は何ですか？

鈴木　ボランティア活動から福祉活動へと「一歩進んだ」という意味がまず一つ、「一歩一歩できることから」という思いも込めています。それと、小学校の理科で習う「気候区分」の中に「ステップ気候（※）」というのがあるんですが、それが表す「原っぱ」みたいな、みんなが集まれる場所になったら良いなという気持ちを込めて「すてっぷ」と名付けました。

社会福祉法人すてっぷ 理事長
鈴木 隆子さん
すずきたかこ

※ステップ気候／ドイツの気候（気象）学者・ケッペンが植生分布に着目して考案した「気候区分」のうち「丈の短い植物が生える草原地域」指す

布施　利用者は全部で何人くらいですか？

鈴木　ここ（わーくはうすてっぷ）には30人くらい、他の施設を合わせると通所者だけで１００人前後ですね。

布施　さっき、施設の中を見せてもらったんですが、いろんな事をやっていましたね。

鈴木　パンの製造と販売、陶芸、パソコンを使った作業などもやってもらっています。

布施　福祉事業の種類も施設も複数あるようですが、なぜ現在のように多く展開するようになったんですか？

鈴木　私たちには、障がいのある人たちが地域社会の中で「普通に働くこと」「普通に暮らすこと」「普通に楽しむこと」を支援していきたいという願いがあります。それが果たされてこそのノーマライゼーションだと思うんですよ。利用者さんや、そのご家族と話をしていて「こういうのがあったら良いな」って思えることがあると、実現可能な範囲で「やっちゃおう！」ってなるんですね。

布施　いやぁ、簡単に言うけれど、さぞかし大変だったろうなぁって思いますよ。

鈴木　ニーズに合わせて一つずつ増やして行ったら現在のようになったという感じですね。

布施　事業所の中には、全国平均の2倍くらいの工賃を支払っている所が2ヶ所あると聞いていますが、高い工賃を払うことができる理由はなんですか？

新井　前橋市総合福祉会館の中の「とらっぱ」と、群馬県立女子大学にある「ぴいす」のことだと思います。「ぴいす」の場合は、他の（一般の）清掃会社を含めて5社による指名競争入札で獲得した仕事なんです。

布施　なるほど。求められる作業の内容や質に関しては他と同じだから、貰える金額も他の清掃会社とほぼ同じ、と。

新井　そうなりますね。

鈴木　一般の企業が受ける仕事と同じ条件でやらせて頂けるのはとても有難いことです。

国産小麦を用い、添加物などを使用せずに製造されているパン。味も品質も「ホンモノ」だというのは一口で分かった。（布施博）

社会福祉法人すてっぷ総務部長
新井 亘さん
あらい わたる

布施　大学の中では何をやっているんですか？

新井　学生食堂、カフェ、購買（売店）の運営、学内清掃を請け負っています。

布施　「障がいのある人たちが働いている」ということに対して、学生さんたちから何か反応のようなものってありますか？

新井　大学の中に投書箱が置いてあるんですが、ある時その中に「暑い日も寒い日もきれいに掃除をしてくれてありがとう　いつも使っていて気持ち良いです」という投書が入っていたと大学の職員が教えてくれました。

布施　それは嬉しいよね。きちんとした作業をやっているからこその意見だよね。これまでの取材の中で、自治体が障がいのある人たちが働く場所を提供しているという例なんかも見て来たけれど、地域の人たちと触れ合う機会を作ってあげることが障がいについてを理解することにも繋がるんでしょうね。障がいのある人たちが社会の中で普通に仕事して、普通に暮らすっていうのは大事だよね。

鈴木　そうですね。それが「ノーマライゼーション」っていうことなんですよね。

布施　いろんな活動をしたりとか、多くの福祉事業を運営されて来たと思うんですが、この先に向けての展望などを聞かせてください。

鈴木　障がいのある人の「自立」という部分に言及すると、「一人で暮らしたい」とか、例え重度の障がいがある場合でも「自分の好きなことをやりたい」という希望を持っている人がいるんですね。それらの希望を出来る限り叶えるための支援ができたら良いなと思っています。

自身と仲間とで始めたボランティア活動に端を発して、いつしかそれが事業となり、「障がいのある人たちとその家族の希望を叶えたい」という思いが後に多くの施設を運営するまでになった社会福祉法人すてっぷ。

同法人の軌跡を著した本「あったらいいなをカタチに」の序文に「一人ひとりが自立し、人生において喜びや感動を得られること、それがすてっぷの願いです」とある。

例え、時代の趨勢（すうせい）や社会の情勢が変遷しようとも、この理念だけは設立時から現在まで変わらず、ノーマライゼーションが実現される未来、ノーマライゼーションという言葉自体がなくなる日まで継承されて行くだろうと思う。

取材／布施博

社会福祉法人 すてっぷ
群馬県前橋市東上野町136-1
TEL / 027-290-6161
https://s-step.com/